

弓の使い手 りめいく？

とて

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

名前：紀季 冬亞（きのり とあ）

身長：176.4cm

所属：太刀川隊

忍田本部長をも上回る実力を持つていて、現ボーダー最強隊員。旧ボーダー時代から戦っているが、1人でもどうにかなってしまうため、チームに入れてもらえてなかつた。太刀川がチームを結成するときスカウトし、誘われたことに喜び承諾。色々な人と師弟関係を築いている。可愛い系のイケメンだが、自覚一切無し。

トリガーセット

メイン サブ

スコープオン アステロイド

イーグレット メテオラ

バイパー 孤月

シールド バッグワーム

サイドエフェクト：トリオン質変換

トリオンの形やその性質を自由に変えられる。戦闘時に使う弓はスコープオンを変形させ、サイドエフェクトを加えることで弦を再現している。ただし、変化のさせ方を欲張りすぎると倒れる。

目

次

第1話
第2話
3話

12 6 1

第1話

4年前、三門市に異次元からのゲートが開きネイバーと呼ばれる侵略者が来て街を壊滅状態にした。その時俺は崩れ行く街を横目でネイバーを倒していくた。何を守れたのか、何が正義なのか…。わからなかつた。そして今…

俺は遠征艇の中で倒れていた。船酔いによつて。

紀李「遠征もうやだ…。」

国近「船酔いを理由に遠征辞退はやめてね…。」

太刀川「もうそろそろ着くぞ。国近、紀李を降ろす準備してくれ。」

紀李、いい加減慣れる。出水も国近手伝え。」

国近「あいあいさー。」

紀李「無理…。」

出水「りよーかい。」

そして玄界に着いた。太刀川さん達隊長組は報告の為、そのまま会議室へ。冬島隊は冬島さんが船酔いダウン中なので当真さんが。俺は出水さんと柚宇さんに連れられて久しぶりの隊室へ。そこで介抱されながら休んでいると太刀川さんが戻ってきた。

国近「おかえりなさい。」

太刀川「おう、突然だが任務だ。今夜決行する。」

出水「本当に急つすね。」

太刀川「紀李、お前も来い。玉狹が匿つているネイバーの黒トリガーを取りに行く。すぐに作戦会議だ、風間隊の作戦室に行くぞ。」

3人「〔了解!〕」

今回の作戦には遠征組（冬島さん抜き）十三輪隊で挑むらしい。俺はそれを聞いたあとぐらいたから意識を失つていた。遠征の疲れ＆船酔いにより体力の消耗が激しく、そのままおネム…

紀李「ふが!?…へ?」

起きると風間隊の作戦室にいたままだつた。

三上 「紀李くん起きた！」

紀李 「みかみかく、おはよお。」

三上 「可愛い：って、みかみかってやめてよ／＼＼＼＼起きたんだつたら、悪いんだけどすぐ向かつてくれる？」

紀李 「りよーかいです。」

俺は走つてボーダー本部を出る。

紀李 「柚宇さん、太刀川さん達はどこ？」

国近『えっとね、今――』

大体の場所を教えてもらい走る。出水さんの方に行き、さつさとそつち側を終わらせて太刀川さんの方に加勢しろということだつた。そういうや敵が誰か教えてもらつてないや、あれだろ玉狹の誰かだろ。あ、光が本部に：

国近『今のは菊地原くんだね。急いでー！』

紀李 「はいはい。」

よしつ、着いた着いた。あ、時枝さん撃たれそう。それにしても聞いてなかつたな、そこにあるの時枝さんと木虎じやん。嵐山隊も加わつたんだ。

紀李 「シールド！」

間に合つたあ。俺は2人を引っ張つて地上に降りる。嵐山さんがいた、あれ？正面にいるのは出水さんと三輪さん？ボロボロの米屋さん落ちてきたし。

米屋 「おいおいお前はこつち側じゃなかつたのかよ、ベイルアウト。」

嵐山 「ありがとう？紀李。お前はどうち側だ？」

あらら、これはあれか。

出水 「おい紀李！お前はこつち側だろ、嵐山隊は敵！」

ですよねー。そう思いながら振り向きながらスコーピオンで嵐山隊の3人に切りかかる。時枝さんが気付いて嵐山さんと木虎を後ろに投げる。そして時枝さんにも軽く避けられた。

嵐山 「充、ありがとな。」

木虎 「嵐山さん、ヤバいですよ」

まあ、さすがに避けられるよね。さて、と。

嵐山「一旦引くぞ、メテオラ。」

うわー、これ嫌い。俺の目の前が爆破する。爆発の中で攻撃されるのは嫌なのでこちらも一旦距離をとる。

出水「紀李、やつてくれたなー。」

紀李「だつて、急いで来たし。あ、三輪さんお久しぶりです。」

三輪「ああ、来てくれて助かる。」

当真『俺もいるぞ、あつさりと防ぎやがつて。』

紀李「やつぱり当真さんだつたんですか。こつちは4人であつとも嵐山隊だから4人ですかね。んー…、3人は迅さんの方行つていつすよ。』

紀李は少し考える素振りを見せた後に言い放つた。この言葉には三輪も驚く。

出水「相手は嵐山隊だぞ?」

紀李「あつちは風刃を使う迅さんですよ?ならこつちは最低限で充分です。」

当真『死なずとも抑えることはできるつてことか。』

三輪「わかつた、頼んだぞ。出水、行くぞ。当真さんも移動お願ひします。」

そう言い、三輪と出水はバツグワームを装備し、その場から離れ迅の方へ向かう。当真もバツグワームを着たまま離れていく。

綾辻『紀李くん以外の反応が消えました。おそらくバツグワームを使っています。』

木虎「不意打ちを狙っているんですかね。」

時枝「だつたらありがたいけど、たぶん違うよ。」

木虎の言葉に時枝が反応する。それに嵐山も頷く。

木虎「どういうことですか?」

嵐山「たぶん、紀李以外は迅の方へ向かつた。」

木虎「え!?」

綾辻『回避!!』

3人は綾辻の声に気づき、その場を一瞬で離れる。次の瞬間、3人のいた所が爆発する。

木虎「これは…!？」

嵐山「来るぞ！」

紀李はアステロイドの矢を大量に作り、避けた3人に向け放つ。それを3人でシールドを張りガードし始めたのでメテオラの矢も生成して混ぜ込む。その瞬間を待っていたように佐鳥がツインスナイプを決めようとする。が、それをあつさりとアステロイドの矢で相殺する。

佐鳥「嘘だろ!?」

紀李「すまんね、佐鳥さん。トマホーク！」

すぐさまメテオラとバイパーを合わせてトマホークを作り、分割せずに佐鳥の撃つたビルに当てる。

佐鳥『マジかよ、ちよカバーするの無理です。』

木虎「私たちのこと忘れてないかしらっ！」

木虎がスコーピオンで紀李に切りかかる。それを避けて蹴飛ばした瞬間に嵐山さんと時枝さんの十字砲火が来る。

紀李「相変わらずのコンビネーションだな。」

そう言いながら全てをスコーピオンとアステロイドで相殺していく。その隙をついて木虎がスコーピオンを振りかざしてくる。しかし、それを嘲笑うかのように紀李は避けるどころか木虎のトリオング給機関をスコーピオンで的確に刺す。

木虎「な…!?」

嵐山と時枝が撃とうとする瞬間に嵐山に木虎をぶん投げて時枝の方へ向かっていく。その瞬間に紀李に銃弾が命中する…はずだった

——カンツ

佐鳥「そのタイミングでシールドかよ！」

紀李は難なく時枝に切りかかるが、その瞬間に時枝が目の前から消える。そして後ろに現れスコーピオンで切りかかってくる。

紀李「良い手でしたよ、俺以外になら。」

紀李がそう言いはなった瞬間、時枝が上から落ちてくるアステロイ

ドにより蜂の巣になる。ギリギリで気付いてシールドを張るが間に合わない

時枝「すみません嵐山さん。落ちます、ベイルアウト！」

木虎もその間にベイルアウトしていて、残りは嵐山と佐鳥になつた。しかし、紀李は嵐山を警戒していた。木虎が嵐山隊に入る前は嵐山がエースとして活躍していたことを知つてゐるからだ。

国近『冬亞くん、向こうに玉狹第一が合流した。』

紀李『あらら、遊んでる暇なくなつちやつた。了解です、速攻終わらせます。』

嵐山「話は済んだか？」

紀李「はい、あとは佐鳥さんで終わりです。」

紀李がそう言つた瞬間に少し距離をとつていたはずの嵐山が串刺しになる。

嵐山「くつ…!？」

嵐山がベイルアウトした直後にトマホークを作り、佐鳥が居そうな建物狙つて放つ。そして何かを確信したようにバッグワームを装備し、ある建物に走り始める。

綾辻『佐鳥くん、紀李くんの反応が消えた』

佐鳥『え、ちょうどすれば？』

嵐山『賢、今すぐそこから逃げろ！そして、迅の方に合流だ。』

佐鳥『嵐山さん、了解です！』

嵐山の指示を聞いた佐鳥は急いでその場を離れようとし、後ろを向く。しかし、そこには紀李がバイパーを周りに浮かせて立つていた。

佐鳥『速すぎだろ！？』

紀李『急ぎなんで。』

そう言うとともに佐鳥を蜂の巣にしてベイルアウトさせる。

紀李『さて、行きますか。玉狹を倒しに。』

第2話

廃墟地帯を駆け抜けながら国近と連絡をとる。

紀李『柚宇さん、あつちどうなつてる?』

国近『迅さんと玉狹第一を分断しようとしたりけど、失敗して押されてる。出水くん、風間さん、三輪くん、スナイパー3人が残ってる。』

紀李『風間に繋いで。』

風間『紀李、悪いが話す隙が。』

紀李『俺のいる方に撤退してください。』

風間『：わかつた。頼むぞ。』

紀李『次、当真さん。』

当真『どうした?』

紀李『俺と出水さんが爆撃開始したら3人で撃ち込んでください。』

迅さんは狙わないでいいです。』

当真『おつけー。』

紀李『柚宇さん、相手の座標を。』

国近『もう送ってるよー。』

紀李『さて、まずは牽制しなきや。』

そう言うとメテオラの矢を大量に作つて弓を構える。

出水『おつけー、やるぞ!』

出水が通信を繋げて叫ぶ。その姿を紀李が目視で確認すると矢を放ち始めた。出水はアステロイドを両手分フルに出して撃ち始める。それを確認したスナイパー3人も撃ち始める。

迅『全員逃げろ、読み逃した!』

木崎『くつ!』

小南『なにこれ!?

烏丸『これは…!?

迅は3人より一瞬早く離れ、その後に3人も離れるが被弾した。その隙に出水は紀李の少し後ろに行き、風間は隣に並ぶ。

迅『あらら、紀李が来ちゃつた。嵐山隊倒すの早くない?』

紀李『思つたより時間かかつた気はしましたよ?』

風間『どうする、紀李。』

紀李『俺を起点にしましよう。カバーお願ひします。』

風間『わかつた。』

三輪『了解。』

出水『おつけー。』

当真『了解。』

奈良坂『奈良坂、了解。』

古寺『古寺、了解。』

遠征組が話してゐる中、玉狹側も話してゐた。

小南『どうするのよ、迅。』

迅『紀李が本気出すかもしれないな。』

木崎『俺たちでは止められんぞ。』

鳥丸『自分は知らないつすけど、相当強いんすよね？』

小南『強いなんてもんじやないわよ。』

迅『俺が風刃使つても五分五分だな。』

鳥丸『!?』

木崎『とりあえず小南と迅を起点に俺らはカバーだ。行くぞ！』

3人『了解！』

お互に作戦が決まつたところで改めて向き合う。戦いの合図は出水のメテオラとなり、その合図で紀李は4人に突っ込んでいった。風間はカメレオンで姿を消す。紀李は左手に孤月を構えて走る。

小南『調子乗るんじゃないわよ！』

小南が双月で抑える。その横から鳥丸が紀李に切りかかる、が、それを小南を吹き飛ばしながら避けて、回し蹴りを鳥丸にきめる。そして、その勢いで切ろうとしたところに木崎のアステロイドが飛んでくる。

紀李『あつぶな！』

切るのをやめ、ギリギリで避ける。そこに風刃の斬撃が飛んでくる。が、それを三輪が孤月で、出水がバイパーで相殺する。

紀李『お返しだよ、トマホーク!!』

一瞬でトマホークを作り迅に向けてぶっぱなす。それを未来予知

によつて避ける。その先に風間がスコートピオンで切りかかる。

迅「おつと！」

——ガンツ

風間「くそつ！」

風間は抑えられた瞬間にすぐに離れまた消えた。紀李に小南が突つ込んでいく。

小南「舐めんなあ！」

しかし、その足元に三輪が鉛弾を撃ち込む。そこに出水がアステロイドを放つ。

鳥丸「エスクード！」

すんでのところで鳥丸のエスクードが出てきて小南を守った。

小南「くつ、脚が。」

紀李「逃がさないよつ！」

小南「うそ!?」

小南の足元からスコートピオンが出てきて串刺しになつた。

鳥丸「小南さん！」

小南「くつ、メテオラ！」

体中からトリオンが盛れる中、メテオラを放つてベイルアウトする。そのメテオラは三輪の方へ行き、三輪は咄嗟にシールドを張る。が、後ろから風刃の斬撃が飛んできて三輪に当たる。

三輪「くつ!？」

三輪がベイルアウトする中、紀李が異変に気付く。

紀李「レイジさんがいない!?」

月見『レーダーにも反応がないわ。』

古寺『すみません、木崎さんに捕まりました！』

紀李『…奈良坂さんと当真さん、その場から離れて！』

その言葉を発したあと古寺の応答がなくなり、光が本部へと戻つて行つた。

紀李（木崎さんはスナイパー組を潰しに入るか、スナイパーとして

参戦してくるのか。…とりあえず、この場を！）

迅「京介、避けろ！」

そう言いながら風刃の斬撃を飛ばす。その言葉を聞いてすぐにそ
の場から離れる。

風間「くつ!?

不意打ちを狙っていた風間は急いでカメレオンを解き、スコーピオ
ンで防ごうとするが間に合わずもろにくらう。

風間「すまん、ベイルアウト。」

紀李「マジですか。出水さん、一旦逃げましょう。」

出水「わかつた、メテオラ!」

出水がメテオラを放ち、2人は一旦距離をとる。突然、迅が誰もい
ない方向に風刃の斬撃を飛ばす。

奈良坂『ぐ、すまん。』

その次の瞬間、1本の光が本部へ帰る。

月見『奈良坂くんも落ちたわ。』

紀李「これはもう無理じやないかな。」

出水「弱気発言だな、まあこの状況は分かるわ。」

月見『当真くんが落とされたわ。』

出水「どうやつて探して当ててんだレイジさんは。」

紀李「元スナイパーだからでしょう。」

4人は距離を取つて対面している。

迅「お二人さん、そろそろ退かないと。」

紀李「そうですね、本気出しちゃおうかな。」

国近『ちょ、冬亞くんだめ!』

紀李『そうしなきや勝てないでしょ。』

紀李が孤月を振り抜くとともに烏丸の首が飛ぶ。

烏丸「え!」

烏丸がベイルアウトした直後にバイパーを放つて迅を狙う。

迅「ちつ…」

迅は未来予知を使つて避けていく。

出水「おいおい、今なんだよ。」

紀李「後で説明します、ここから本氣でやるので。」

そう言つた瞬間にアステロイドの矢を大量に生成し、スコーピオン

の弓で放っていく。

迅「…アステロイドか」

木崎「フルガード！」

木崎が突然迅の目の前に現れてシールドをはる。

紀李「関係ないね！」

空いている手からアステロイドを出して2分割し、それをまた1つにした。そして、大量の矢を作り、放つ。

木崎「量が少なくなつた？ シールド！ …なに!?」

ボーダー内でもトリオン量が多い木崎のシールドが割られることは滅多になかつた、が、紀李の矢はそれを貫通し、木崎を襲う。

迅「おいおい、なんだ今の反則技は。」

紀李「出水さん、カバーお願ひします。」

そう言つて孤月を抜き、迅に向かつて走つていく。

迅「…やばいな、」

——ブンつ

迅「うわっ、ちょ。」

紀李の斬撃をギリギリで避けて、風刃の斬撃を飛ばす。が、それを斬撃で相殺される。

迅「久しぶりに見たな、蛇型孤月。」

紀李「でしょ？ さつさとくらつて死んでくださいよ！」

出水（おいおい、孤月を伸ばすとか反則技すぎんだろ。）

バイパーで狙いながらひたすら蛇型孤月を当てに行く。迅は未来予知と風刃でかすりながらもギリギリ凌いでいく。

迅「くつ、あと少し…。」

出水「迅さんあれ凌ぐのかよ。てか、入り込む隙がねえよ。」

紀李は間髪入れずに攻撃を繰り返す。途中、バイパーをスコープオノに変え、分割し、細かいナイフを大量に飛ばす。

迅「どんなやり方だよ…。」

迅の左腕が落ち、紀李の左腕も落ちる。しかし、迅の方が明らかに多くのトリオンが漏れていた。

紀李「コブラ改！」

紀李は右でバイパーを2分割し、左でアステロイドを2分割しそれを合成し、右のバイパーを順に合成して放つた。

迅「わっ、ちょ。くつ、せめて…」

迅は避けつつ、斬撃を1発飛ばす。その矛先は出水であった。

出水「あっ…すまん紀李。」

出水がベイルアウトする。

紀李「うらあ！」

紀李はスコーキピオンで左手を作り、メテオラを飛ばしてから迅に突っ込んでいく。

迅「なんだそりや…くつ！」

左手で迅を切りに行くが、それを風刃で押さえる。だが風刃にヒビが入る。

迅「…やばいけど、チェックメイトだ。」

紀李の足元が光り、そこから斬撃が飛ぶ。それを左手から右手にスコーキピオンを移し一瞬押さえ、左手を生やして爆発させる。

紀李「次は勝ちます…よ。」

迅はその場でベイルアウトし、紀李は光となり本部へ飛んでいく。

3話

ベッドの上に落ちる。フラフラと立ち上がりながらソファの方へ移動する。

紀李「あー…負けた。」

国近「冬亞くん！」

国近がすごい勢いでそばに寄ってきて、紀李に抱きつく。

紀李「おつ、と。柚宇さん。」

国近「大丈夫？なんで無茶したの？」

紀李「無茶してないですよ…ただ寝かせてください…。」

そう言うとそのまま眠りについた。そこに出水と太刀川が来る。

出水「紀李、大丈夫か？」

太刀川「おつかれ…つてあらら。」

国近「寝ちゃった。」

太刀川「じゃあ、国近は紀李見といてくれ。出水、風間隊の作戦室

行くぞ。」

出水「了解。」

国近「はーい。」

太刀川と出水が部屋を出ていったあとに、毛布を持ち出して紀李へかける。

国近「無茶しちゃって…。」

そう言いながら紀李の頭を撫でる。しばらくすると、太刀川が任務中止の連絡をしにきて、太刀川はそのまま用事があると言つてどこかに行き、出水は家に帰つて行つた。紀李はそのまま寝ていて、国近はそれを眺めながら隣で雑魚寝していた。

早朝、紀李が目覚める。

紀李「ん…んー。ああ、そつか寝ちゃつたんだっけ。」

伸びをして周りを見ると、国近がソファの下で寝ていた。それを見た紀李は罪悪感に襲われ、国近を抱き上げてベット（国近専用徹ゲーフ睡眠室）へと連れていきそこに寝かせる。しばらく本を読んだ後に、

キツチンの方で冷蔵庫にあるものを確認して、朝食を作り始める。

国近「…ん、おはよお。いい匂いがするぞー?」

紀李「おはようございます。柚宇さんの分もありますよ?」

国近「おお、さすが冬亞くん。手伝うよー。」

そこから2人で準備し、共に朝食をとつた。片付けを終え、一旦帰ることにした。

紀李「次の任務つていつですっけ?」

国近「明日集まつて決めようつて話だつたと思うよー?」

紀李「明日ですかー?、了解です。」

国近「あ、ここでいいよ。ありがとね、じゃあね!」

紀李「はーい。お疲れ様です。」

国近を家近くまで送り、その後1人歩いて家に向かう。

街を抜け、河川敷を歩いていると後ろから木崎さんが来た。

木崎「冬亞、おかえり。」

紀李「ただいまです。昨日はお疲れ様でした。」

木崎「迅と相打ちは凄かつたな。」

紀李「たまたまですよ。」

木崎「昨日はそのまま本部で寝たのか?」

紀李「そうですね、あそこまで本気でやつたの久しぶりだったのではわかんないです。」

そこから今回遠征のこと、玉狹に入った新人のことなどを話していくと支部に着いた。

木崎「このあとはどうするんだ?」

紀李「そうですね、明日集まつて防衛任務の予定決めるのでそれまではわかんないです。」

そこから今回の遠征のこと、玉狹に入った新人のことなどを話していくと支部に着いた。

木崎「ただいま。」

宇佐美「おかげりー!つて、キノリン!久しぶりー、遠征から帰つてきたんだ!!」

紀李「え? 宇佐美さん、きのフガ?:」

言いかけた紀李の口を木崎が押さえる。

木崎「あいつら今日は来るのか？」

宇佐美「うん、学校終わつたら来るつて言つてたよー。」

そう言いながら宇佐美はリビングに入つていく。そこで紀李の口が開放される。

木崎「昨日の任務は極秘任務だ。宇佐美は新人の相手していたから知らない。」

紀李「あー、了解です。てか、オペ無しでやつてたんすか!?」

木崎「嵐山隊が全滅したあと、綾辻がやつてくれた。最初は指示通りの場所行つただけだ。あとは迅の予知。」

紀李「あんたら変態つすか？」

木崎「それはお前だろ。」

紀李の驚いた顔に木崎は呆れた。いくら本来のオペレーターでないとは言え、綾辻は普段連携重視の嵐山隊のオペレーターである。そして、玉狹第一は暴力変態集団：は言い過ぎだが、小南を自由にして他がカバー、時々全員で暴れる。嵐山隊の木虎を軸にするのと似てるといえば似てるが…大分違う。

木崎「そりゃあお前学校は？」

紀李「明日行きますよ。行く前に受けた期末テストと通知表受け取つて、そのあと本部行つてミーティング後、夕飯食つてから帰つてきます。」

木崎「そりゃあ今日はゆつくり休めるな。あと、今日の午後、新人3人が来るから挨拶しとけ。1人は昨日狙おうとしたネイバーだ。」

紀李「はーい。」

しばらくリビングでテレビを見て、その後、宇佐美と木崎と昼食を済ませた。しばらく話していると三雲、空閑、雨取の3人が来た。

木崎「来たな、3人とも。」

三雲「ここにちは、レイジさんに宇佐美さん…。」

空閑「誰だ？」

3人が首を傾げた。この支部に所属している隊員は全員紹介を受けたはずであつた。宇佐美が気づいて紹介する。

宇佐美「あ、紹介するね。この可愛い系のイケメンは紀李 冬亞くん。修くんと遊真くんと同じ学年だよ。本部の所属だけどここに住んでるの。まあ、家みたいな感じ?」

紀李「そんな感じです。よろしく。」

三雲「よろしくお願ひします。」

木崎はその様子を見て何かを閃いた。

木崎「空閑、小南が来るまで冬亞と戦つてみろ。」

紀李「え?」

空閑「この人強いの?」

紀李「え!」

紀李は木崎の言葉に驚き、空閑のまさかの一言に少しショックを受けていた。

木崎「まあ、やつてみればわかる。三雲は今日は俺が見てやる。」

三雲「はい、お願ひします。」

紀李と空閑が訓練室に入つた。三雲と雨取はその様子をモニター越しに見ていた。紀李は空閑から少し距離をとつたところでトリガーを起動した。

紀李「トリガー起動。」

そう言うと、黒いコートにつつまれた。その方には「A01」と書いてある。三雲がそれを見て驚く。

三雲「A級1位:!!」